

教育格差のない世の中を目指して…

できる子とできない子の
違いは何か？

小さい頃から好奇心のかたまりだった原田少年。その延長にあった勉強は大の得意。小学生の頃からクラスメートに勉強を教えるのが好きだったという。

一方で、学校の勉強には物足りなさを感じていた。そこで、小五から塾に通いはじめるが、初めて出合う問題に対し、「こんなにもしろい世界があったんだ！」と驚き、さらに勉強にのめり込んだ。

中高は鹿児島ラ・サールに進学。ここで過ごした六年間、彼の人生に大きな影響を与えた。寮生活を通じて培われた生涯に続く仲間との出会いも大きい。それ以上に、学校の勉強をこなしていれば、塾に通わなくても最難関大学に合格させてくれる質の高い教育を実感できたからだ。このラ・サールの教えこそ、今の日本に必要な教育。この教えを世の中に広めて、教育格差をなくすことが自分の使命と考えるようになった。

東大法学部に現役合格。大学時代は、複数の塾・予備校でさまざまな年齢・学力層の生徒を指導。特に勉強が苦手な子の指導に自ら手を挙げ、勉強ができる子とできない子の違いを見つけることに力を注いだ。その結果、見えてきたのが『学習の作法』（詳しくは著書で紹介）の有無。いわゆるできる子にはこの『学習の作法』が当たり前のように身に付いていた。しかし、どんなに時間をかけて勉強をしても、この作法が身に付いていなければ、成績は伸びないという結論に達したのだ。

教育とは人を育てること。

大学卒業後は官僚が弁護士を目指すのが一般的といわれているエリートコースの中で、



中高は鹿児島ラ・サール、大学は東大法学部。誰もが憧れるエリートコースを歩んでいながら、個人の幸せよりも日本の幸せを考え、確固たる教育理念を持ってはじめて小さな塾。日本の教育格差をなくすために、一人の若者が立ち上がった。

原田氏が目指したのは確固たる教育理念を持った小さな塾。現在、GLS予備校には約30名の現役高校生・浪人生が大学受験を目指して通っている。

授業は生徒一人ひとりの学力に合わせたカリキュラムを進める個別指導で、一教室五〜七人。文系出身でありながら理系が得意というオールマイティーな原田氏が、全教科を一人で担当している。浪人生に対しては、午前一回三時間、午後一回



塾は“人を育てる”場所

三時間のコースを設定し、長時間続けて勉強する習慣と集中力をつける一方、昼休みを二時間しっかりと取らせ、その間、同じ浪人生同士でコミュニケーションを図り、連帯感を持たせるなど、個別と集団のメリットを上手に組み合わせている。

一方、近ごろ原田氏は教育コンサルティングとして、塾や学校に向けての指導もしている。「教育とは人を育てること。自分の塾で生徒の指導をするには、人数に限界がありますが、自分の考えをほかの指導者に伝えて、それを広げていくことは可能です。資源が乏しい日本では技術で勝負するしかない。そのためには人を育てていかなければなりません」と原田氏。

また、生まれ故郷の福岡を出て、全国から生徒が集まる鹿児島ラ・サール、東大で学生時代を過ごしてきて感じた地方の教育格差。勉強をする環境は平等でなければならぬという思いから、「近い将来、自分の生まれ故郷でも塾をはじめたい」と原田氏は語る。今も昔も、「日本をよくしていきたい」という思いが、私塾には込められている。



原田 将孝
MASATAKA HARADA

1982年福岡県生まれ。東大法学部卒。灘や開成にも合格したが、ラ・サールの理念と教育方針に感銘を受け、鹿児島ラ・サール中学校に進学。東大入学後は複数の塾・予備校でさまざまな年齢・学力層の生徒を指導し、講師としての能力を磨いてきた。鹿児島にあるラ・サールと同等以上の教育が受けられる塾をめざし、GLS予備校を設立。

●「GLS予備校」WEBサイト
<http://gls-yobikou.com/>